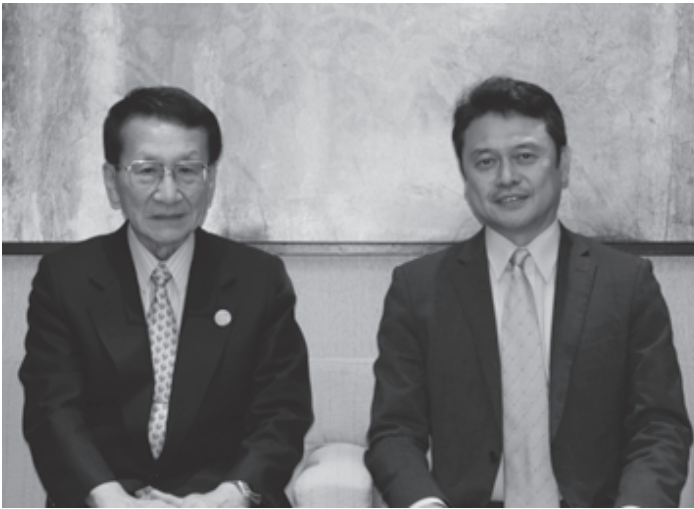


新任教授紹介

本号では、兵庫医科大学内科学講座呼吸器科の教授に新たにご就任された木島 貴志先生をご紹介します。



話し手●木島 貴志

兵庫医科大学内科学講座呼吸器科主任教授

聞き手●西條 長宏

医療法人社団友好会 副院長

木島 貴志先生プロフィール

1990年大阪大学医学部医学科卒業後、大阪大学第3内科入局。2000年米国ハーバード大学ダナ・ファーバー癌研究所リサーチ・フェロー。2003年大阪大学大学院医学系研究科呼吸器・免疫アレルギー内科学助手(助教)、2013年同講師を経て、2014年大阪大学医学部附属病院呼吸器内科病院教授。2017年より現職。日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本呼吸器学会専門医・指導医・代議員、日本肺癌学会評議員、日本がん治療認定医機構認定医・暫定教育医など。



どのような医師を目指したか

西條 2017年4月から兵庫医科大学内科学講座呼吸器科主任教授に就任された木島貴志先生にお話を伺いたと思います。まず先生の経歴についてお伺いしますが、ご出身地は大阪ですか。

木島 生まれと育ちは兵庫県の宝塚市です。大学は大阪で、現在は芦屋市在住ですから、ずっと阪神間です。

西條 医師になろうと思われたきっかけは何ですか。

木島 世の中の役に立つ仕事がしたいと考えていましたので、理系では医師が最もダイレクトに貢献でき、また人と接する職であることが自分に合っていると思い、この道を選びました。

西條 どのような医師になりたいと思われましたか。

木島 その当時イメージはなかったのですが、緒方洪庵先生の「扶氏医戒之略」にあるような人助けや縁の下の力持ちへの憧れはありました。病気を治すのはわれわれ医師ではなく、患者さん本人の治癒力であり、医師はそれを最大限に発揮させるサポート役であると考えます。

西條 ご出身は大阪大学で、呼吸器疾患、特に悪性腫瘍を中心に診療、研究をされていますが、それを専門にしようと思われた理由は何ですか。

木島 学生のときに第3内科の先輩でもある岸本忠三先生や当時大阪大学におられた本庶佑先生の講義を聞き、免疫学が面白いなと感じていました。またその当時、肺がんは非常に死亡率が高く治療法がないという状況であり、呼吸器にも興味がありました。呼吸器系は外気と交通している臓器で粉塵や病原体に常に曝されているため、その病態形成において免疫とも深い関わりがあり、呼吸器と免疫の2

つとも学べるところ、また自分の性格上、自由な雰囲気のところが多いと思ひまして、第3内科に飛び込んだということです。入局後は特に川瀬一郎先生(呼吸器・免疫内科学前教授)のお人柄に惹かれ、最終的に呼吸器を専門とするに至りました。



大阪大学第3内科(8研)時代の研究

西條 私も大阪大学第3内科・呼吸器内科(8研)の出身ですが、私が8研で研究していた頃は、堂島川を挟んで医学部の本部と病院があり、病院の裏にある竹尾結核研究所でわれわれは研究をしていました。

木島 私も学生時代、研修医1年目は中之島でしたが、1993年から病院が吹田に移りました。

西條 先生がいらした頃の研究室はどのような雰囲気でしたか。

木島 私が卒業した1990年時は教授不在の時期でした。3年間研修して1994年に大学に戻ったときは岸本先生が教授になっておられました。その頃の8研は、山村雄一先生の時代から行っていた活性化リンパ球療法(LAK療法)を研究している人や、遺伝子治療の研究を始めた人もいました。私は岸本先生に免疫遺伝子治療を勧められ、各種サイトカインやCD80/B7-1発現ウイルスベクターを作製し、肺がん細胞や腫瘍関連線維芽細胞に遺伝子導入して実験していました。

西條 最もやりたかったことは、肺がんに関連する免疫だったのですか。

木島 免疫にこだわっていたわけではないのですが、何か新しい肺がんの診断法や治療法の開発をやりたいと思っていました。